



毎日の詩 3



udauda

目次

自分だけの夜	1
広がる	2
道	3
一人	4
雨音	5
眠れなくなる	6
中断	7
なまえをください	8
ゲーム	9
夜長	10
紙飛行機	11
こっそり	12
半月	13
追憶	14
本気	15
スーパームーン	16
さざなみ	17
表現	18
流れ始めた	19
訪れ	20
僕の命は	21
冬の朝	22
優しい季節	23
北風	24
はぐれる	25
書き留める	26
いられない	27
白の世界	28
かたち	29
唇	30
まばたき	31
鎖	32

雪夜	33
今 僕は	34
刺さる	35
風雪	36
余り	37
春への道	38
夜の病	39
春になれば	40
二人	41
一晚	42
帰り道	43
有在	44
まだ見えない花	45
しない日	46
霧	47
雨の午後	48
滅びのイメージ	49
桜の痕	50

自分だけの夜

消えそうで
消え切らない
確かな肉体と
やるせない気持ち

失って
失ってもなお
額に残る
寂しさという微熱

握ったハンドルの前で
沈んだベッドの上で
人は自分だけの夜を
抱えて生きる

広がる

無責任に未来は広がっていて
無軌道な僕はそそのかされる

明日が色香を振りまいていて
浮気な僕は乗りかえようとする

眩しい背中を振り向かせて
抱きしめたらもう今日なのに

道

草むらを歩こうと
踏み分けた足が見つけた
獣が渡った後の通りやすい地面
それが道だ

岩壁をはいあがろうと
探った手が見つかんだ
ちょうどいい大きさの出っ張り
それが道だ

迷った森の中で
焦った心が行き着いた
予想だにしない出口
それが僕だ

一人

二人は一人を笑う
二人は一人を評価する
一人には反論するスペースすらない

一人は勝手に道に迷い
一人は勝手に浮き沈みして
何とか家へと帰り着く

暗い夜に溺れて
意識を失くしても
朝になればうっかり目を覚まし

またこの両手は
顔なんか洗ってしまうのだろう
ひとりでの

雨音

どんな名言も
息苦しく聞こえるときは
雨が跳ねる音も
重みとなって返ってくる

何かの意味を見出さぬよう
テレビも心の声も
BGM代わりにするだけ

どんな愚かさも
許されない窓で
今さらどんな自分を
取り繕えばいい

吐き出した息は
束の間で消えた
戸惑いを濁らせた
自分を隠し切れないまま

眠れなくなる

夜が静寂を響かせている
そして僕は眠れなくなる

暗闇が見えないものを
見させようとする
そして僕は眠れなくなる

月明かりが眩しくなる
真っ昼間の太陽よりも

テレビの音にかき消されていた
心の声が聴こえてくる
絶えず僕にささやいてくる
言い返せないのを知っていて

中断

雨は降っているけど
黙っているみたいだ

差されたはずの水を
実は欲しがっていた自分だ

濡れそぼった傘は
力なく靴箱に寄りかかる

本は口を開いたまま
続きを読まれる宛でもない

絡まった希望と欲望と現状が
雨よりも前に僕に立ちふさがる

なまえをください

はなをさかせたので
なまえをください

このはなびらにあう
なまえをください

いちねんじゅう
さきほこってられるような
なまえをください

よるはまっくらいから
なまえをください

あのまどべににあう
なまえをください

つみとることが
つみぶかくおもえるような
なまえをください

はながかれても
わたしはいきているから
いつだってよんでください
なまえを

ゲーム

説明もなく
地球は回る
動かし方も分からずに
心臓は胸に響く

どんなゲームで
この世界は成り立っている？
解き明かしてみたい
勇者じゃなくても

扉を開く手が
謎に迫る
地面を駆ける足が
謎を増やす

予定調和でもない
意外な結末でもない
僕らのエンディングは
終わっても続く

夜長

ヒトの体温から
遠く離れて
ソファで紅茶を飲んでいる
ぼんやりと

もう少し軽妙な
心持ちでいたかったのに
秋も夜も
深まってしまうから

伝えきれなかった自分が
落ち葉のように積み重なる
まだ着慣れない冬服が
チクチクとしている

紙飛行機

向こう岸に不時着して
二度と戻らない
紙飛行機をいくつ飛ばしたろう

プロペラを持たない希望だから
そこにある風を
余すことなくつかみたい

僕が描けるくらいの
軌道じゃ困るんだ
もっと もっと 遠くのほうへ

僕に見えるくらいの
夢じゃ物足りない
星よりも 見えない 高さで飛べ

言葉の逆風を抜けて
想像の風を越えて
予測付かない未来へ届け

こっそり

討論なんてしたくない
答え合わせするつもりもない
秋に染まりかけた
木の葉をぼんやり見つめながら
一人で思っていたい

受け入れようなんて言わない
だけど拒んだりもしない
あなたが発した言葉を
耳の片隅に残しておいて
一日を過ごしている

劇的になんて望まない
進化だなんて大げさだ
まだ半袖のシャツに
新しい季節を染み込ませて
誰にも気づかれなくらいに
こっそり変わっていきたい

半月

欠落した状態で
夜に照らし出されてしまった半分

闇をいいことに
見せたくない姿を消してしまったもう半分

満月の時よりも
自分に似ている
半月がそこにある
満ちているようにさえ見える

満月の時
姿を見せるもう半分は
きっと何かを隠しているような気がする
その眩しさで

追憶

薄日の引き潮とともに
過去の人の顔は消え
宵闇の訪れとともに
自分の輪郭も薄れていく

何もかも忘れてしまったはずなのに
確かに覚えている
指先に付きまとう寂しさが

今となっておぼろな記憶ほど
盛んに僕を呼んでいる
塗り替えてできた記憶さえ
懐かしくもある満月の夜

本気

気づかれたくて
傷つけるのを止めて
束の間の同情のために

病んでしまうまで
戦い続けるのを止めて
知らない他人の評価のために

死なないで
それがどんな言葉より
一番伝わりやすい方法でも

見えないものを
見せるために
あなたの体を証拠にしないで

自分を痛めないで
痛み逃げないで
あなたの本気を見せて

スーパームーン

静かに近づいてくる
悲しみにも喜びにも見える
目いっぱい膨らんでいる
瞳を飲み込んで

潜めていた感情が
高揚している
声もなく呻いている

茂みの花が
見とれている
砂漠の砂も
見とれている

調和を乱して
現実には幻想に浸る
昼間よりも露わな世界
今 全身が月

さざなみ

転がる地球の上で
立ち止まることを愛して
さざなみの前にうづくまる
棒になる

鳥は地面から離れ
空から地球に近づく
僕は水面に寄って
見えない地球に張り付く

仕方なかったんだ
戻れやしないんだ
投げやりな言葉たちが
黙り込む砂浜

抱き止められそうなくらいの
かすかな潮風でも
海は踊る
逃げ損ねた靴を濡らす

表現

裏の裏をかいた
表だったのに
相手から見れば
いつもどおりの表だった

心が重ねた歴史を
表現は無視して
また表面をなぞっている

一度見せてしまったものを
後で裏返せはしない
あなたが裏読みできたとしても

流れ始めた

全ては流れ始めた
心はもちろん
体も僕も

あらゆる決め事も
守りたいものも
時の粒子となって
見えなくなった

風には空が
川には海があるのに
僕にはそれも見つからないのだ

ひそかに溜めておいた涙も
ここに留めては置けなかった
流れていく僕は
失うものを見届けることすらできない

訪れ

闇の中にはもう
冬が沁みている
風の中にはもう
冬が混じってる

忘れることで
澄んでいるように見せる
過去の濁り

すぐに冬は行き渡る
陽の当たる午後にも
僕の臓器にも

かわせるはずもない
心に訪れる
荒涼とした風景

僕の命は

僕の命は
日記だった
僕が読み返すばかりの

僕の命は
叫びだった
そこで消えてしまうだけの

たくさんの人と出会って
別れた
何も渡せないまま
何も譲れないまま

手紙にも
話にもなれなかった
僕の昨日が
まだつぶやいている

風の強い砂浜で
今日も拾い集める
誰にあげるでもない
ちいさな喜びと
ささいな悲しみを

冬の朝

夜みたいな
朝に目覚める

犬の鳴き声が
狼のように響く

心臓の音だけが
やけに騒がしい

水滴の貼りついた
窓を開く

寝息で満ちている
冬の街

冷やされた頬に
朝が伝わる

優しい季節

仕事帰りに寄った
コンビニで買って食べた
あんまんが優しくて

たどり着いた家の
タイル張りの浴室の
シャワーが優しくて

こわばった体を
なだめる感触が
際立つ季節

朝からベランダに
干してあった優しさを
取り込んでくるまる

優しい夢を夢見て
踏ん張ったまぶたを解く

北風

そよげなくて
人々は
怯むばかり

鋭い風に
見つけられた
寒がりな肌

かすめとられた
温もりは
過去へと移ろう

行き場のない震えに
立ち止まる
塵舞う中で

はぐれる

会社から遠く
コンビニから遠く
僕がはぐれているのに
夜道は気づかない

工事現場から遠く
空き地からも遠く
闇に消えていこうとして
いつも夜明けに阻まれる

どこへ行く気もないくせに
月にはそう見透かされている
上手くはぐれていけなくて
気づけばただの散歩をしている

書き留める

時にさらわれそうな
心を今のうちに
書き留める

沈みゆく過去から
言葉をすくい上げる
今に濡らされていても

失われつつある
感触を手に
刻み付けるように

あの瞬間の
せめて残り香でも
書き止める

読み返す日は
来るのだろうか
あの一行を

いられない

いつまでも涙を
流し続けていられない
なぐさめようとする前に
立ち直ってる僕に呆れないでよ

うつむいて空を
見ないふりしていられない
あんなに反省してたのに
前を向く僕の人格を疑わないでよ

心の曇りが完璧に
晴れたわけじゃない
だからまた突然泣き出しても
泣いたふりだなんて思わないでよ

白の世界

夜のうちに
ひそかに
積もっておいて

まるで人の方が
来訪者のように
雪が迎えてる

新聞を取ろうとする
かがんだ背中に
冷たさが

眠気も覚めて
引き寄せられた
白の世界に

かたち

怒ったからって
物に当たるなんて
芸がないし

やりきれないからって
叫ぶなんて
ダサいし

だけど何かにしなくちゃ
いられない
いられない

握りしめたこぶしには
恥ずかしくて見せられない
ベタすぎる感情

唇

そんなに隠さなくても
誰も探そうとはしやしない
この感覚はおそらく
一生言葉になりはしない

越えられるものではないから
ただ待ってる
冷たい空に締め付けられて
だんだんと麻痺していくのを

散らばった情動を
心に見せようと
慌てて塗ったペンキが
剥げていくだけの明日でも

逆流してくる過去を
この唇で閉じ込めて
年の瀬の街の賑わいの中に
体を浸して

まばたき

寒気が包んで
雲が険しさを増した
北風が研いで
星が光を増した

誰もいない窓を
雪が斜めに通り過ぎていく
張りつめた景色を
中和している

地べたに溶けたはずの雪が
僕に深く積もってくる
いつもと変わらないはずの
時が胸に迫ってくる

除夜の鐘がもたらす
静けさに埋もれながら
刹那の詰まった一年を
まばたきは越えていく

鎖

ある日
鎖は
ほどかれていた

逆らってもいいと
誰かの
声が聞こえた

放たれた
もう僕は
獣じゃないのに

荒れる風が
散らかしていった野原を
自由に歩けないよ

雪夜

消え入りそうな弱さで
降り積もる

見惚れるような儚さで
降り積もる

いつの間にか
夜は雪で埋め尽くされている

僕の拙い言葉も
明日には雪で埋め尽くされるだろう

カーテンを閉じる
今日思うことはもう何もない

今 僕は

今僕は
見ているのか
見られているのか
向き合っているのだろうか

今僕は
知っているのか
知らされているのか
考えているのだろうか

今僕は
生きているのか
生かされているのか
繋がれているのだろうか

今僕は
話しているのか
喋らされているのか
訊かれてもいないのに

刺さる

甲高い笑い声が
刺さる
ためらいのない鋭さで

落ちてゆく陽の光が
刺さる
痛みに付け入る角度で

残せなかったのか
残してしまったのか
ふと考える駐車場

かつての自分の言葉が
刺さる
赤らむほどの青さで

気付かずに育てていた
あらかじめ刺さるのを
待っていたかのような傷口

風雪

「分かってるよ」と
言いたくなる
北風がその存在を
窓越しに知らせてくる

布団を一枚
重ねて寝る
閉ざしても冷たさは
どこからか上り込んでくる

時計の針が
0時に近づく
責められてはしないのに
何か弁解したくなる

涙が一滴
瞼を溢れる
閉ざされた瞳が
なおも語ろうとして

降ったそばから
紛れていく
この雪は多分
積もりはしない

余り

猫が争う声にさえ
何だか気持ちが紛れるのです

この夜に余って
佇んでいるかのような僕です

ありきたりな慰めを
今日は妙に欲しがっているのです

いつもより弱弱しく
光を映し出している月です

ほつれ放しの感情を
束の間さらけ出していたいのです

吹きすさぶ風に
乱れるばかりの髪です

春への道

歩き出したい
外の光を浴びて
浮足立った気持ちを
全身にまとうせて

靴音を奏でたい
足跡を残すより
景色を感じたい
意識に囚われるより

ゆるやかな時と
吐息をともにして
流れていけたなら
香りのように

降る雪に目を凝らし
吹く風に目を閉じて
春までは道半ば

夜の病

失くしたように
振る舞っていた
初めから
なかった翼を

汚れ過ぎて
映らなくなった
鏡を見つめる
まぎれもない私

とっさに誰かを
傷つけてしまう
自分に向けて
握りしめた刃なのに

闇に体を
委ねきれない
堕ちてゆく先は
明日に決まってるから

耐えられない
世界がまともすぎて
しがみつく
夜の病みに

春になれば

春になれば
きっと分かる
縮こまった体が
守ろうとしていたものが

春になれば
きっと分かる
凍り付いた土が
隠し持っていた芽が

春になれば
きっと分かる
風に揺れる枝の
こぼしたかった色が

春になれば
きっと分かる
目を覚ました熊の
蓄えていた反動が

春になれば
春になれば
湧き上がる命と
香り立つ空

木枯らしの中で
秘めていたものを
春一番の向こうで
見せ合いっこしよう

二人

ケンカしても
じゃれ合っているようにしか
見えない

険悪な雰囲気も
どこかかわいらしく
見えてくる

他人事なのに
行く末が気になる
二人

うらやましくて
ほほえましくもある
景色

観察するだけの
俺はなんでここに
いるんだか

一晩

一晩寝れば
分かることがあるだろうか

一晩寝れば
忘れられることがあるだろうか

一晩寝れば
答えは一つに絞られるだろうか

溜まりすぎた不純物を
夢がろ過してくれるだろうか

一晩寝れば
目覚めるものがあるだろうか

帰り道

通り過ぎる電車の音に
はっと振り向いて
そしてまたうつむく

無感情なコンクリに
抗いながら
寄りかかりたがってる体

袋小路の道も
時は悠々と越えてゆく
その向こうに
明日の僕はいるのだろうか

立ち止まる心を巻き込んで
時は黙々と流れてゆく
帰り道さえ
行き道にして

有在

無には還れそうにいない
欠乏や喪失さえ
抱え込んでしまう
集めたがりの心では

破られた後
千切られた後
跡形もなく消し去られた後も
まだ瞳は探してしまう
いやらしげな救いを

あの破片が
何かのヒントに見えて仕方ない
この無力感が
何かの手がかりに思えて仕方ない

まだ見えない花

まだ見えない花が
開いている
まだ見ぬ未来に

まだ見えない花が
悶えている
季節のはざままで

まだ見えない花が
聞いている
春一番の声を

まだ見えない花が
問うている
地上はまだか

しない日

しんとしていようか
言葉どころか
体も発さないで

ぼうっとしていようか
画面や見出しに
心を傾けず

ちいさなスペースで
一日を広く
使ってみようか

なにもしないで
散らかした書類と
命を並べて置こうか

霧

眩しい光が
闇に溶けて
夜全体を
柔らかく包む

掴み損ねたと
思っていたものすら
幻だったのだと知る
霧の中で

寄り添うように
水は触れ
花々たちは
密やかに潤う

絶え間ない流れ
止めどない迷い
霧は閉ざす
切りがない夜を

ぼやけてゆく
透き通ってゆく
映さないことさえ
美しい世界で

雨の午後

雨の午後
感傷が掻き集める
取るに足らない出来事の数々

窓の外
打たれる土の音
香り立つ木の葉

戻れない時間が
戻ってきた
少しの狂おしさを乗せて

あの温もりに近づけば
あの痛みが付いてくる
地面はだんだんぬかるんでゆく

思い出が先に濡れて
眺めるばかりの
僕を誘ってる

滅びのイメージ

庭の隅で
息絶えたバツタを
蟻んこが持ち去っていく
後に残された
陽だまり

格好よく滅びたつもりの
廃墟だって
まだ滅びる途中で
壁は崩れ
草は生い茂る

終末は
そこに留まっておれない
始まらずにはおれない

にわか仕込みで
覚えた絶望は
跡形もなく消え去る

滅びのイメージなど
すぐに滅ぼされていく
遠慮なく咲いた
一輪の花によって

桜の痕

吹かずとも
やがては散る
花なのに

風は吹き
届けられる
虚ろな瞳にも

去り行く姿さえ
咲いているような
乱舞

その儚さは
心には永遠の
爪痕

毎日の詩3

著 udauda

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
